

武蔵野日曜集会

父の許より

——ヨハネ伝第8章31～47節——

1994年12月18日

小池辰雄

受けとって一つになること 本当の自由は天的な必然 「青春とは」 チャップリンの6分間演説 日本の教育はダメ 真理の体現者 キリストと一如の根源現実をいただく 自我の奴隷 贖いの十字架の後には聖霊がくる

【ヨハネ8・31～47】

31 爰にイエス己を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。32 また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし』33 かれら答う『われらはアブラハムの裔にして未だ人の奴隷となりし事なし。如何なれば「なんじら自由を得べし」と言うか』34 イエス答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。35 奴隷はとこしえに家に居らず、子は永遠に居るなり。36 この故に子もし汝らに自由を得させば、汝ら実に自由とならん。37 我は汝らがアブラハムの裔なるを知る、されど我が言なんじらの衷に留らぬ故に、我を殺さんと謀る。38 我はわが父の許にて見しことを語り、汝らは又なんじらの父より聞きしこと行う』39 かれら答えて言う『われらの父はアブラハムなり』イエス言い給う『もしアブラハムの子ならば、アブラハムの業をなさん。40 然るに汝らは今、神より聴きたる真理を汝らに告ぐる者なる我を殺さんと謀る。アブラハムは斯ることを為さざりき。41 汝らは汝らの父の業を為すなり』かれら言う『われら淫行によりて生まれず、我らの父はただ一人、即ち神なり』42 イエス言いたもう『神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛せん、われ神より出でて来ればなり、我は己より来るにあらず、神われを遣し給えり、43 何故わが語ること を悟らぬか、是わが言をきくこと能わぬに因る。44 汝らは己が父、悪魔より出でて己が父の慾を行わんことを望む。彼は最初より人殺しなり、また真その中になき故に真に立たず、彼は虚偽をかたる毎に己より語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり。45 然るに我は真を告ぐるによりて、汝ら我を信ぜず、46 汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る。われ真を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。47 神より出づる者は神の言をきく、汝らの聴かぬは神



より出でぬに困る』

●受けとって一つになること

31 爰にイエス己を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。』

「己を信じたるユダヤ人に」とあるが、本当は、「信ずる」というよりも、受けとって一つになることです。「信ずる」という言葉が躓きなんです。

「信ずるとは一体何だ?」

ということになる。それは、イエスが神の子であるという、そういう命題を信じたってしようがない。

「信ずる(真とする)」

ということは、自分がその中に入って、キリストと一如とならなければ、本当の「信ずる(真とする)」ということはないわけです。

「汝等もし常に我が言に居らば」

とある。これが非常に大事な字です。ドイツ語でいうと「ブライベン」という言葉になるが、そこにとどまっていることです。

「言葉の中に居る」

ということとは、

「言葉と一つになっている」

ということ。その内容を本当に身をもって証していることが、

「我が言に居る」

ということ。キリストの言葉を体現する。体現して、常に居るといのが、「我が言に居る」ということ。そういう意味で、

「居る、留まっている、常住している」

ということ。

「住まう」

という言葉がいいですね。そうすれば、本当の弟子だという。

親鸞は、

「自分には一人も弟子はいない」

と言いました。この頃は、親子だとか兄弟だとか、そういうことを止めてしまって、一人の独立性をもつと自覚しなければいけない、ということをしてアレビでも言っていました。本当の在り方というものは、本当にそれと同質な次元に居ること、そうすれば本当の弟子だということ。

「ただ、『先生、先生』と言っているだけではダメなんだ」



ということですが。

「我が言に居る」

というのは、言葉を体現する、全存在で現すること。「体現」とはいい言葉だと思います。そうすれば、

「真理を知らん」

とある。普通、「真理」という言葉は非常に観念的に響く。まことの事態というような気持がこの「真理」なんです。「知る」も頭で知るのではない。それを身体でもって受けとる、体受する。体受しなければ体現できない。本当に体受すると、体現することになる。ただ、事が分かったとか分からないとか、分かるとか分からないとか、そういう判断はよくない。

「分かりました」

という言葉は非常に観念的な言葉です。

「呑み込みました」

と言うならまだいい。あるいは、

「食らいました」「体受しました」

ということ。体受するためには、それと一如の事態にならなければダメです。これが本当の「知る」世界です。ヘブライ語の「知る」というのはそういう深い内実をもっています。ドイツ語の「エルケンネン」という言葉は少し観念的でうまくない。「ヴェッセン」の方がいい。体受・体現ということですが。

●本当の自由は天的な必然

³²また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし』

そうすると、

「本当の事態がつかめる」

ということ。「真理を知る」とは、

「本当の事態を本当に身につける」

ということですが。

「真理は汝らに自由を得さすべし」

とある。どうも、日本語の漢字の訳がちよつと誤解を招くので困る。

「そういう真まことの事態は汝らに自由をえさせる」

ということですが。

普通、「自由」というと、自分で身勝手にやるのが自由だと思っている。これまた自由ではない。本当の自由は天的な必然なんです。普通言っている自由は自分にとらわれている。自分にとらわれて、自分の思うことをやっていることが自由だと思っている。そうではない。自分が捨てられてないよね。



即ち、その原点は何かというと、無^ななんです。無^な我^が、自分が無いこと。有我^ののときはダメなんです、いわゆる自意識なんていうものは。無^の、無^我の状態になる。そうすると、天来のこの真理が響いてやって来る。それで、その天的な必然にのつかっていくと、これが本当の自由なんです。

「ああ、自然はいいなあ」

というが、何が自然はいいかというと、風が吹けば木の葉は揺れる。あの木の葉がゆれている姿がいかに自然だ。これが風に完全にのつかってしまっているわけです。風によって動いている。それが自然の姿なんです。

天的必然は、人間の世界でいうと、神の意^いを受けとっていく。神意を受けとって動いていたキリストが本当の自由なんです。キリストは、

「自分は自分で動いていない。神さまの御意に従わせられている。神さまの御意、神さまの力で動いている。自分では何もできない」と仰った。

「我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、

それは我が意^いを求めずして、我を遣し給いし者の御意^いを求むるに因^よる。」(ヨ

ハネ5・30)

と言ったのがそのことなんです。相対的な私たちは自分でやっていますよ、それはひとつの自由だと思っている。エラスムスはそういうような自由を非常に主張した。そしたら、それに対してルッターが、

「そうではない。我々は自由意志ではなくて奴隷意志だ。我々は奴隷だから、主人の言うことにただ無条件に従っているだけだ。それが本当の自由だ」

と応えた。エラスムスは近代的な自由論だ。ルッターは福音的な自由の世界です。パウロは完全にキリストに捕まってしまうと、それで動いていた。パウロは本当の自由を動いていた。ローマ書8章に、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」²キ

リスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放し

たればなり。」(ロマ8:1~2)

これが本当の自由の世界です。御霊によつて歩くのが本当の自由だということが、その後ずっと書いてある。そういうわけです。体受・体現、無^な我^がということですよ。

●「青春とは」

若い人は生き生きとしている。年を取ると、その生き生きさが段々なくなっていく。ところが、本当の「青春」というものは、これは誰が書いた文章だか知らないけれども、こういう詩をみつけた。



「青春とは人生の或る期間を言うのではない、心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。

歳月は皮膚のしわを増すが情熱を失う時に精神はしぼむ。

苦悶や、狐疑や、不安、恐怖、失望、こういふものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥に帰せしめてしまふ。

年は七十であろうと、十八であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。

曰く、驚異への愛慕心、空にひらめく星辰、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰、事に処する剛毅な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探究心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる、

人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる、

希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美と喜悦、勇氣と壮大、そして偉力の靈感を受ける限り、人の若さは失われない。

これらの靈感が絶え、悲嘆の白雪が人の心の奥までも蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを堅くとぎすに至れば、この時にこそ人は全く老いて、神の憐れみを乞うる他はなくなる。

なる。」(原作 サムエル・ウルマン、邦訳 岡田義夫)

おもしろい文章だね。我々は御霊の力でもってその現実に入れるわけです。

キリストは、自分は何もできないけれども、神さまの御意に従い、み力にあずかっているから、何もできないと言っているひとが何でもできる。即ち、無我です。無が無限大のものを受けとるところの出発点なんです。何か自分がサムシングであるとダメなんです。自分はサムシングではなくてナッシングだ、何ものでもない。そうすると、無限無量なものが出てくる。これが福音的な秘訣です。常に新たに無の世界にいと、常に新たに上からやってくる。これは自分で体験して分かる。サムシングに何か加えようとすると、くたびれる。

●チャップリンの6分間演説

チャップリンという素晴らしい俳優がいましたね。あの人はもともとイギリス出身で、アメリカに行った。チャップリンはなぜ凄いか。彼は始めは浮浪児で、ベンチに横たわって寝なければならぬような非常な貧乏人だったのだけれども、アメリカでその才能が認められた。何でも一芸に秀でていく人は無の境地をもっている。チャップリンの敵はヒットラーだった。ヒットラーは独裁者で非常に自我が強いやつだ。自我の強い独裁的な人は



ダメなんです。終りがダメになる。ナポレオンもちょっとそういうところがある。ところが、チャップリンはそのヒットラーに対して、独裁的な人間はダメだ、本当は人助けをする人でなければダメだと言った。『独裁者』という映画の中に有名な「チャップリンの6分間演説」というのがある。

「私は皇帝になりたくない。支配はしたくない。できれば援助したい。ユダヤ人も黒人も白人も、人類はお互いに助けあうべきである。他人の幸福を念願として、お互いに憎み合ったりしてはならない。世界には全人類を養う富がある。人生は自由で楽しいはずであるのに、貪欲が人類を毒し、憎悪をもたらし、悲劇と流血を招いた。スピードも意志を通さず、機械は貧富の差を作り、知識をえて人類は懐疑的になった。思想だけがあって感情がなく、人間性が失われた。知識より思いやりが必要である。思いやりがないと暴力だけが残る。航空機とラジオは我々を接近させ、人類の良心に呼びかけて、世界を一つにする力がある。私の声は全世界に伝わり、失意の人々にも届いている。人々は罪なくして苦しんでいる。人々よ失望してはならない。貪欲はやがて姿を消し、恐怖もやがて消え去り、独裁者は死に絶える。大衆は再び権力を取り戻し、自由は決して失われぬ！ 兵士諸君、犠牲になるな！ 独裁者の奴隷になるな！ 彼らは諸君をあざむき、犠牲を強いて家畜のように追い廻す。彼らは人間ではない！ 心も頭も機械に等しい。諸君は機械ではない！ 人間だ！ 心に愛を抱いている。愛を知らぬ者だけが憎み合うのだ。独裁者を排して自由の為に戦え！」「神の王国は人間の中にある」。すべての人間の中に！ 諸君の中に諸君は幸福を生む力を持っている。人生は美しく、自由であり、すばらしいものだ！ 諸君の力を民主主義の為に結集しよう！ よき世界の為に戦おう！ 青年に希望を与え、老人に保障を与えよう。独裁者も同じ約束をした。だが彼らは約束を守らない！ 彼らの野心を満たし、大衆を奴隷にした！ 戦おう！ 約束を果たすために。世界に自由をもたらし、国境を除き、貪欲と憎悪を追放しよう。良識の為に戦おう。文化の進展が全人類を幸福に導くように。兵士諸君、民主主義の為に！

ハンナ、聞こえるかい。元気をお出し。ご覧、暗い雲が消え去った。太陽が輝いている。明るい光がさし始めた。新しい世界が開けてきた。人類は貪欲と憎悪と暴力を克服したのだ。人間の魂は翼を与えられて、やっと飛び始めた。虹の中に飛び始めた。希望に輝く未来に向かって。輝かしい未来が君にも私にもやって来る。我々すべてに！

ハンナ、元気をお出し。ハンナ、聞いたかい。聞きなさい！

「知識より思いやりが必要である」とは、いい言葉ですね。思いやりがなかったらダメです。

●日本の教育はダメ

今は実際、思いやりが非常に少なくなつた。電車に乗ってもわかる。若い人が腰かけて、



前に年取った人が立っていても譲ろうとしない。昔はそんなことはなかった。ドイツでは、若い人は必ず立つ。これは、もともとキリスト教が、歴史的な宗教的な土台があるからやはり違う。ところが、日本にはそういった宗教性がないから、日本の民主主義というのは困ったものだ。

「デモクラシーはアンダー・ゴッド（神の下）において」

とリンカーンが言っている。日本の民主主義というのは「アンダー・ゴッド」を忘れていて。「神の下」ではないんだ。人間相互のことでいつもガタガタガタガタやっている。日本はそういう自覚が本当に足りない。やはり、本当の宗教をもたないから。キリスト教ではないんだ、キリスト道なんだ。ただ教えではない。道なんです。道は歩かなければダメです。

「教えが分かった、分からない」

ではない。道を本当に自分で歩いたか、歩かないか。歩いているかどうか、ということなんです。

だから、日本の教育はダメなんです、教育者自身がそういう心境をもっていないから。教育は技術ではない。困ったものだね。福音をもった人は、あなた方一人一人が本当の教育者なんです。若い人に遠慮なく言わなくてはダメです。

「いわゆる民主主義ではダメだ、アンダー・ゴッドでなければダメだ」

と。キリストが「父よ」と言われた、この父なる神をもたないとね。クリスマスなら、クリスマスに本当の意味でキリストの許に来いと。いわゆるクリスマス騒ぎではない。「クリスマス」とは「クリストス・メッセ」、キリストのミサのことです。どうぞ、皆さんご自身がみな伝道者ですから、遠慮なくやってください。

「思想だけがあって、本当の感情がなくなつて、人間性が失われた」

と、チャップリンはいいことを言っている。チャップリンというのはなかなか大した役者ですよ、中身をちゃんともっている。思いやりというのは非常に大事なことです。これはもちろん愛です。結局、すべては福音が土台なら間違いない。福音が土台でないと、本当のそういうった世界が——いわゆる道徳ではないから、もつと生きた真理ですから——展開してこない。

●真理の体現者

真理の具体的な体現者はイエス・キリストです。キリストという具体的な真理の体現者、そこにくればいい。

31 『汝等もし常に我が言に居らば、

とはそういうことです。

真にわが弟子なり。

「一緒だ、私と一つだよ、そして本当の事態がわかるぞ」と。

32 また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし』



そういうことになれば、それが本当の自由だと。自己に捕らわれないのが自由なんです。自己にとらわれているのは自由ではない。

大自然を見ていると、そこから真理がくる。雲が動いているのを見ても、あれは本当に自由な姿だね。この頃、曙の明星がとてきれいだ。朝、少し早く起きると、東の空に明星が現れている。私は空を見て、星の在り方を見るのが好きだ。冬の空のオリオンなんてきれいだから。

自由というのは、無我のところにある自由があるということ。普通の人たちは知らない。自分勝手なことが自由だと思っている。冗談じゃない。それは自分に、自己に囚われている。

³³ かれら答う『われらはアブラハムの裔にして未だ人の奴隷となりし事なし。

如何なれば「なんじら自由を得べし」と言うか』

「アブラハムの裔」というのは血統的な裔、霊的な裔、霊的にアブラハムの精神を受けとっているうちはダメなんです。霊的な裔でなければ。血統的な裔なんていうことを言っているなら、これが本当のアブラハムの裔なんだけれども、血族的にただ続いていたって、そんなものはダメです。我々が霊的にアブラハムの裔なんです。「アブラハム」というのはヘブライ語で「多くの者の父」という意味です。

³⁴ イエス答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。

その通り。「罪を犯す者は罪の奴隷」なんだけれども、実は罪を犯すのは、どうして犯すかという、自我があるからです。だから、自我の奴隷になっている。自分自身の奴隷になっている。

³⁵ 奴隷はとこしえに家に居らず、子は永遠に居るなり。

そういう奴隷は神さまの家にいない。自分は神さまの子だから、子は永遠に居る。神さまを父としている。

●キリストと一如の根源現実をいただく

父神・霊神ということです。

「神は霊なれば、霊と真をもつて仕えよ」

という。ただ漠然と「神」と言ったって、神は分からないですよ。キリストが「父よ」と言っているのが、我々の神さまだからね。キリストに自現したところの神です。神の現象は何かというと、キリストが現象なんです。神は隠れたる存在です。

「神がもし分かたら、それは神ではない」

とエックハルトが言っている。知られざる神が本当の神だ。知られざる神を誰が顕したかという、キリストが顕した。キリストは神の現象体です。



我々はまたキリストの現象体でなければダメなんだ、クリスチャンというのは。

「キリストを信ずる、」

なんて言ったって、いわゆる「信ずる」ではダメなんだ。

「私はキリストと、一つです。躓いたり転んだりするけれども、本質的には一つです」

と、これが本当のクリスチャンの告白でなければダメです。

「そうか、そんなに立派なのか」

なんて、立派ではない。

「私はひとつも立派ではない。しかし、本質はキリストと一つだ」

と、これがはつきり言えなければ、キリストを受けとっているとは言えないわけです。

「キリストと一如になっている根源現実をいただいている」

のが本当のクリスチャンです。それのない者はクリスチャンではない。それは名ばかりのクリスチャンだ。根源現実をいただいているから、本当の力がくる。そういう力のないクリスチャンはクリスチャンではない。

内村鑑三はそういう世界をもっていた。内村先生がなぜ凄いかというと、そういう人だった。相対的な教会がどうであるなんて、そんなことはどうでもいいんだと。「無教会」というのは、無教会が教会に対立しているような、そんな無教会ではダメなんです。無教会がまた観念化してしまっている。あんなのはダメです。教会が在ったって無くたって、そんなことはどうでもいい。問題は、本当に自分がキリストの僕であるか、キリストを生きているかということです。キリストを生きることです。人がどう思うと、そんなことはどうでもいい。

「私の中にはキリストが生きています」

と、それがはつきりと言えなくては。これは楽しくてしょうがない、力がきてしょうがない。相対的人間小池がどうであろうと、そんなことは問題ではない。

「根源現実がそこにあるか」

「はい、あります」

と。だから、力がくる。楽しい。永遠の青春である。

自分の使命的な仕事に打ち込んでいる人はみな力がある。力が上からくるんです。我々人間というのは一つの事しかできないんだから、それに全身で打ち込まなくては。そうすると、力がくるから。何をしていようと、内容はどれでも一向差し支えない。どういこうとをしているから偉いの偉くないのと、そんなことはひとつもない。それは男でも女でも、老いたる者も若き者も同じことです。

●自我の奴隷

そういうことでね、楽しくやっていきましょう。歓びの音信おとずれだからね。「福音」というの



は面白い言葉だ。キリストの「福の音信」ということ。ギリシヤ語の「ユウアンゲリオン」というのはそういう意味です。

32 また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得させずべし』
それは楽しくて、自由でしようがない。「自由を得させずべし」なんて、得るもへツタクレもない。「その世界は自由だよ」ということです。

「まことの現実がくると、それが自由なんだよ」ということです。

「真理は自由を得させずべし」

なんていう言い方をするものだから、観念的にひびいてしまって困る。聖書の言葉でも、言葉にこだわらないでくださいよ。

34 イエス答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。』

「罪の奴隷なり」とは、

「自我の奴隷だ」

ということですよ。罪の本体は自我心だからね。この事かの事の悪いことが罪ではない。自我の奴隷にならなければ、問題はもうなくなってしまうんだ。上から力がきてしようがない。

「力が来てしようがない」

という言葉はおもしろいね。これは

「己むを得ざるなり」

ということで、西郷南洲が、

「己むを得ざるにして動くことが本当の至誠だ」

と言った。至誠は己むを得ざるに動く。止むに止まれずして動いているのが至誠の世界です。圧倒されているんです。神・キリストに圧倒されて生きています。圧倒されると力がくる。

38 我はわが父の許にて見しことを語り、汝らは又なんじらの父より聞きしことを行ふ』³⁹ かれら答えて言う『われらの父はアブラハムなり』

「われらの父はアブラハムなり」なんて、肉的な相対的なことを言っている。

イエス言い給う『もしアブラハムの子ならば、アブラハムの業をなさん。』

本当に霊的な子なら、アブラハムと同じことをするはずなのに、ダメではないか。私の言うことをさっぱり受けとっていないではないか。アブラハムはそんなことをしなかったとお前たちはお前たちの父の業をしている。お前たちの父は悪魔だぞと、キリストははつきり言った。

40 然るに汝らは今、神より聴きたる真理を汝らに告ぐる者なる我を殺さんと謀る。アブラハムは斯ることを為さざりき。⁴¹ 汝らは汝らの父の業を為すなり』
かれら言う『われら淫行によりて生まれず、我らの父はただ一人、即ち神なり』



42 イエス言いたもう『神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛せん、われ神より出でて来ればなり、我は己より来るにあらず、神われを遣し給えり、⁴³ 何故わが語ることを悟らぬか、是わが言をきくこと能わぬに因る。⁴⁴ 汝らは己が父、悪魔より出でて己が父の慾を行わんことを望む。彼は最初より人殺しなり、また真その中になき故に真に立たず、彼は虚偽をかたる毎に己より語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり。

お前さんたちの「父」は悪魔だよと、はつきり、キリストに言われてしまった。悪魔というのは、神に逆らうもの、分裂をもたらすものだ、嘘つきであり人殺しだと。お前たちが「アブラハムが自分の先祖だ」と言っただって、ひとつもダメだ。

「肉的にいくらアブラハムの裔だって、そんなことは問題ではない。霊的な裔にならなければダメだ」ということです。

45 然るに我は真を告ぐるによりて、汝ら我を信ぜず、

「我を信ぜず」とは、「私を本ものとしなさい」ということ。

46 汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る。われ真を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。

「真を告ぐる」というこの「真」は、これはいいです。

47 神より出づる者は神の言をきく、汝らの聴かぬは神より出でぬに因る』

「お前さんたちが神なんて言っているのは、それは悪魔だ。それだから、イエスを殺そうとしているのがはつきり分かるではないか」

というわけです。

● 贖いの十字架の後には聖霊がくる

それで最後にはとうとう、神に逆らう連中からキリストは十字架に架けられるわけだ。けれども、相対的現実では、キリストは十字架に架けられたけれども、彼はいきなり天界へ行くことができたんです。けれども、この十字架は贖いの十字架だ。処刑された十字架ではない。キリストは自ら贖いの十字架に架かった。贖罪の十字架です。クリスチャンが十字架を信ずるのは、これは贖いだからです。贖いの十字架の後には聖霊がくる。

イザヤ書53章です。この預言を成就したのは、言うまでもなくキリストです。

「³ かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患をしれり。また面をおおいて避ることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼をとうとまざりき。

⁴ まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわ



れら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。⁵ 彼はわれらの愆^{とが}のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安をあとう。そのうたれし瘡^{かさ}によりてわれらは癒^いされたり。⁶ われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡^{すべ}てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

⁷ 彼はくるしめらるれどもみずから謙^へだりて口をひらかず、屠場^{ほふりば}にひかる羔羊^{こひつじ}の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。⁸ かれは虐待^{しいたげ}と審判^{さむらん}によりて取去^{とりのぞ}れたり。その代^よの人のうち誰か彼が活けるものの地より絶^たれしことを思いたりしや。彼は民の^たがの為にうたれしなり。」(イザヤ53・3～8)

これがキリストの十字架の具体的な預言です。こういうイザヤ書をキリストは愛読された。この預言を彼はちゃんと知ってらつしやるからそれを成就された。

「我が神、我が神、なんぞ我を棄てたまえり」

という、あの悲痛な言葉はその奥に反対の中身をもっている。

「人の罪の贖いのために私は棄てられました。分かっています」

と、それは言わない。ただ、

「彼ら為すところを知らず、彼らを赦したまえ」

と言ったのがそのことです。まあ、大変なひとです、イエスというひとは。やはり、救い主ですね。

仏教的な悟りの世界とはちよつと違う。ドロドロな人間の世界を救うのはただ悟りではダメなんだ。個人的な心境としては、悟りはいいよ。けれども、人を本当に救って助けていく、それにはただ悟りではダメなんです。

